

## メディアのリテラシーを教えることは可能なのか？

Who can teach Media Literacy?

関 口 久 雄

一部の人たちにとっては、既知が当然の概念、否、すでに使い古された業界用語、しかし、多くの人たちにとっては、ほとんど共有されずにいることは、それが「メディア・リテラシー」であろう。そもそもリテラシー(literacy)とは、いわゆる文字というメディアの読み書きの能力として用いられていたが、<sup>(1)</sup>今では、さまざまな領域における多義的な技術や技能等として使われている。<sup>(2)</sup>その1つであるメディア・リテラシー(media literacy)とは、一般的に、次のように説明できる。

メディアを介したコミュニケーションを意識的にとらえ、批判的に吟味し、自律的に展開する営み、おそびそれを支える術や素養のこと。メディア教育とはほぼ同義で、中国語では媒体素養(教育)という。かつては、低俗でステレオタイプに満ちたテレビを批判的に読み解くために青少年に必要な能力、などとして喧伝されたが、現在ではテレビというメディア、青少年という世代に限らず、すべての人々が本からケータイに至る多様なメディアを批判的にとらえ、自律的に関わるために必要な営みととらえられている。一連の朝日問題の報道を振り返れば、受け手だけでなく送り手にもメディア・リテラシーが必須であり、それを欠けばジャーナリズムが成り立たないことがよくわかる。むやみにマスメディアやケータイを批難するメディア悪玉論とは別物。メディアの技術的活用、批判的受容、そして能動的表現という3要素のバランスが肝要。北米、北欧などが進んでいるが、日本でも各地で教育実践が進められている。[メディア・リテラシー／メディアと社会(水

メディア・リテラシーの考え方の前提となるのは、あらゆる情報は構成／編集されている。かつては、新聞やテレビに代表される大きな影響力を持つ、いわゆるマスメディアからの情報の流れや仕組み、産業構造等を知るとともに、明示的に／暗示的に、伝えられる、それらの情報に込められた意図や偏見等を、鵜呑みにせず批判的に読み解き、悪影響を回避する、いわゆる賢い消費者のための教育という側面が強調されていた。ただし、時は流れ、メディア機器の進歩による操作の簡易化、廉価化、デジタル化等により、かつては新聞社やテレビ局のような一部の企業に独占されていた情報発信を、誰もが簡単に行えるようになった、それゆえに、単なる受信者としてではなく、個々人が発信者として、メディアを活用する能力が求められるようになってきた。言いかえれば、かつては、メディア＝いわゆるマスコミとして扱えばよかった、が、今では、メディア＝メディアとなった。では、そのメディアとは？

そもそも「メディア(media)」とは、一般に「人間がコミュニケーションするための手段」。こ難しく言えば「人間の意思表現ならびに情報伝達を助け、助長する媒体」、言いかえれば「人間を拡張すると同時に人間を社会的に枠づける役割を果たす媒介」である。そして、そのような“間に入るもの”をその意味の核としながら、「デジタル」「マルチ」等の修飾語を加えながら、多義的な概念として、社会生活のあらゆる場面で使われている。また、古いものから新しいものまでメディアは社会の至るところに存在している。人間の身体からはじまり私たちを取り巻くあらゆるものがメディアとなる可能性をもつ。同時にメディアは歴史・社会的に生成されてきたもの、現在のメディア<sup>(3)</sup>の姿は絶対的・固定的ではなく、絶えず変容していくのである。

一方的な情報を受け取るのみの他人事で済んでいた時代を経て、自分事＝発信者としての術やルールを知る必要性も生じてきた、メディアとの新たな関係を構築しなければならなくなったのである。このような時代において、メディア・リテラシーを教える、とは、いかなるものであるべきなのか。<sup>(4)</sup>

たとえば、さまざまなメディアを活用する、ということが考えられる。最新のメディアは常に登場してくる、それらを単純に選択し、用いれば良いのであろうか。しかし、現実的には、さまざまな問題と対峙することになる。たとえば、1957年にマーシャル・マクルーハンが書いた「壁のない教室(Classrooms without Walls)」での指摘を無視することはできない。映画やテレビといった新しいメディア＝映像が世の中に普及し、視聴覚教材＝audio and visual aidsが、教育現場に登場した時の混乱を論じている。

今日われわれが「視聴覚教材」と当然のことのようについていうのは、われわれがいまだに本を標準と考え、他のメディアを付随的なものと思っているからである。《…》今日、新しいメディアはこの伝統的な教室授業を、単に補強するだけではなく、おびやかしているのである。この挑戦に対する常套的な回答は、かつてマンガ本が怖がられ、軽蔑され、教室から閉め出されたのと同様に、映画やテレビのもつ不幸な性格や影響力を告発することである。そうしたメディアの内容と形式の良い点、悪い点を慎重に他の芸術や叙述とならべて検討してみれば、教師にとっても重要な資産となりうることは明らかだろう。[マクルーハン＋カーペンター2003, pp.105-109]

映画、テレビを、コンピュータ(インターネット)に置きかえれば、約60年前の状況が、現在進行形の問題となる、教育の世界は保守的ゆえ、いまだに文字こそが優れた教育に最適なもの、それ以外は浅薄な不適切なものとみなされているかもしれない。いずれにしても、歴史はくり返される、

新しきものは、ほとんど考慮もされず、熱狂的に受け入れられ、同時に、既存の基準や習慣等によって、辛辣に拒絶される。よって、Wikipediaに代表される“新しい手法”が忌避されるのは当然のことなのかもしれない。<sup>(5)</sup>

新しいメディアとの関係の現状を考えてみれば、たとえば、手頃なメディアとして、いろいろなカタチで映像が使用されることに気がつく。その前提となるのは、文字＝読解力が必要で難しい、映像＝具体的で誰でもわかる、という図式が想定される。けれども、いわゆる文字の連なりである文章には、その約束事である文法が、その表現を豊かにする語彙があるのと同様に、映像という言葉にも文法や語彙が存在する。各々のメディアを活用するには、各々の規則等を理解・修得していなければならない。さらに、言うまでもなく、いかなる分野においても、経験＝積み重ねも要するものである。したがって、普段から自らが接していない、熟知していないメディアを、使うことも適切ではないはずである。他方、いわゆる学生＝若い人たちは、映像を日常的に見ている／理解している、だから、映像を使うことは、親しみやすく有効である、と思いがちである。しかし、ネットに投稿される短時間の映像に親しみ、映像の停止等を主体的に行うことに慣れている者たちにとって、受身的に長時間の映像を見ることは苦痛ではないのか<sup>(6)</sup>もしれない。

メディア・リテラシーを説く者自身がメディアである、という自覚も必要であろう。その声や話し方等が注目されることもあるが、たとえば、その授業で配布するレジュメ等の資料もメディアなのである。それは、単に情報が印刷された紙ではない、その紙面は、当然のように、ある論理によって構成され、情報は多ければ多い方が、より少なく選択されていた方が、情報がどのように配置されていれば等々、取捨選択の編集という過程を経て生み出されたもののはずである。そして、あらゆる情報は構成／編集されている、伝えられる情報に込められた意図や偏見を、鵜呑みにせずに批判的に読み解く、というメディア・リテラシーの基本に立ち返れば、自らがその批判・検討をされる対象になる、は避けることはできない。かつて

は情報や特権を独占しながらも批判等に晒されなかったマスメディアの立場が大きく変化したように、自己省察もない(かもしれない)無責任な者たちからの罵詈雑言を浴びない特権的なポジションは、もはや存在しない<sup>(7)</sup>のである。

換言すれば、メディア・リテラシーに限らず、いわゆる教育方法に正解はない。さまざまな高邁な理想とシビアな現実が錯綜する。それゆえに、それぞれの現場で各々の創意工夫や試行錯誤は続くのであろう。<sup>(8)</sup>

## 注

- (1) いわゆる literacy を考察するには、さまざまなアプローチが想定できる。たとえば、いわゆる西洋の近代以降に目を向けると、19世紀のイギリスの学校教育において身につけさせられた basic skills としての、3R = Reading, wRiting, aRithmetic = 読み + 書き + 算術や、17世紀のアメリカ大陸の植民地においてなされた、4R = Reading, wRiting, aRithmetic, Religion = 読み + 書き + 算術 + 宗教の“R”にまつわるエピソード等が興味深い<[https://en.wikipedia.org/wiki/The\\_three\\_Rs](https://en.wikipedia.org/wiki/The_three_Rs)>。また、日本における、いわゆる読み書き教育に必然的に伴う時代や社会との折り合いの付け方(=地域性、道徳性、政治性)等については、水越が指摘しているように([水越 2014, p. 170]), [豊田1995(原本は1937年)] [無着1995(原本は1951年)]等の活動も視野に入れなければならないであろう。なお、それぞれの本が出版の翌年に映画化もされている。それらの教育が、いわゆる大衆に認知されたものであったことが確認できる。『綴方教室(1938年公開/監督：山本嘉次郎)』『山びこ学校(1952年公開/監督：今井正)』。
- (2) 当然のことではあるが、各業界におけるリテラシー=専門的知識の体系は異なる。たとえば、主にコンピュータを扱う人たちの間でのその専門的技能等は、コンピュータ・リテラシー(あるいは、情報リテラシー)とされ、会計分野の人たちでは、財務諸表等の会計情報を扱う能力が、会計リテラシーと呼ばれている。なお、2011年に、ユネスコは「教師のためのメディア情報リテラシーカリキュラム(Media and Information Curriculum for Teachers)」として、メディア・リテラシーと情報リテラシーを一体のものとして考え方を提案し、10のリテラシー(メディア、インフォメーション、表現と情報の自由、ライブラリー、ニュース、コンピュータ、インターネット、デジタル、映画、ゲーム、テレビ&広告)をあげている [かながわメディアリテラシー

研究所 2013, p.12]。

- (3) 本稿の筆者が、学生向けに用いるメディアの解説。その説明の後に、以下のような文章が加わる。《では、私は大学でなにをやっているのか。簡単に言えば「メディアで遊ぶ(Playing with Media)」というワークショップ。「ワークショップ(workshop)」とは、もともと「作業場」「工房」を表わすことばであるが、現在では「共同で創作活動をする」あるいは「頭で考えるだけでなく、身体も動かしながら学び合う」、参加する人たちが「対等に、お互いに刺激し合い、助け合う」「共育。を实践する」場。そのワークショップでは、まず今日のさまざまなメディアを主体的に体験することからはじまる。たとえば、テレビ番組を見る、雑誌やマンガを読む、CDを聴く、ビデオ/DVDを鑑賞する、各種ゲームに興じる、ウェブにアクセスする、チャットでおしゃべりする、映画館に行く、美術館／博物館を訪れる、ライブに参加する、お洒落な店で美味しい料理を食べる、流行のファッションを着こなす、時には空を眺めたり、できればお堅い本とも対峙して欲しい…。体験した後に考える。「なぜ楽しかったのだろうか／なぜつまらなかったのだろうか」。同ジャンル／他ジャンルのものとの比較もしてみる。また「あのやり方は問題だ」「こうすればもっとよくなるはず」等々「自分ならばどうするか。をさまざまな視点から熟慮してみる。そして、自らなにかしらのメディアをつくる、を試みるのである。「傍観／批判するだけでなく、私にも…できる(かもしれない)」。「メディア遊び。は、当たり前前の約束ごとに従属してしまった私たちに新鮮な驚きと開かれた可能性を与えてくれる。そして、「遊び。だからこそ、真剣である。しがらみも制約もタブーもない。言い訳する相手もない。自分自身と向き合うしかないのである。「遊び。の基本は「楽しさ。の追求。楽しむことができなければ、なににも生まれないからである。」「ところで、メディアってなに？ メディアで遊ぶ？」<[http://archive.kyotogakuen.ac.jp/~o\\_human/10th/sociology7\\_detail.html](http://archive.kyotogakuen.ac.jp/~o_human/10th/sociology7_detail.html)>。なお、いわゆるメディアの研究に対して、「メディア学」を用いる者と「メディア論」を選択する者がいる。筆者は、未分化でアクチュアルなものとしてのメディアと対峙する者として後者を選択する [水越2014, pp.28-29]。
- (4) 京都学園大学人間文化学部メディア社会学科の2015年度の春学期の授業として「メディア・リテラシー」が開講され、筆者が担当した。この科目は、もともとの別の担当者は存在したが、諸事情から2年前、筆者に担当者が変更し、昨年度と一昨年度は秋学期の3日間の集中講義で対応し、「音(楽)＋つくる人たち」というテーマで行った。授業の詳細はレジュメを参照<[http://bricolage.jp/study/kgu2014\\_media-literacy\\_20150216-0217-0218\\_resume.pdf](http://bricolage.jp/study/kgu2014_media-literacy_20150216-0217-0218_resume.pdf)>。今年度は、講義の概要は、前年までと同様に《時間や空間の制約を越えて、より多くの人たちと、コミュニケーションをするために、私たちは、

## メディアのリテラシーを教えることは可能なのか？

声や身振り、絵や文字からはじまり、いわゆる技術を介することによって、電信、電話、録音、印刷、放送等のさまざまなメディアを活用してきた。そして、デジタルに代表される新たなメディアの登場によって人間および社会のコミュニケーションは変化を続けている。本講義は、さまざまなメディアが錯綜することが予測される今後のメディア社会について、映像資料を中心に検討し、『メディア・リテラシー(＝メディアでなにができるのか?)』を考察していく。』としたが、今回は、『今年度は、2003年に放送されたテレビドラマ『ビギナー』を通して、メディアと社会を考える。』というカタチで、新たな展開を試みた。『ビギナー』とは、フジテレビ系列で、2003年に「月9(月曜21時)」枠で放映された全11話の旧司法試験の修習生たちのドラマである(脚本：水橋文美江)。《合格まで平均5年はかかるという「司法試験」。名もない平凡なOL(契約社員)だった23歳のカエデが奮起して奇跡的に司法試験に合格。すごく優秀そうな同期の仲間たちとともに司法研修所の門をくぐり一日目の授業を終えたとき成り行きでカエデの周りに集まっていたのはとっても風変わりな7人の仲間たちだった。ろくに学校に行っていない落ちこぼれ(24歳)や子育てにでんてこ舞いの主婦(29歳)やリストラ寸前だった部長(52歳)や失脚した官僚(42歳)や苦節10年で警備員のバイトをしながらやっと受かったみたいなのヒトとか。年齢も、かかえている事情も、野心も夢も、まるでバラバラの「同級生たち」が弁護士や検察官や裁判官として巣立っていくまでの青春群像ドラマ。》「公式サイト」より<[http://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/beginner/](http://www.fujitv.co.jp/b_hp/beginner/)>。ドラマを全話を視聴させ、受講生の意見交換を積極的に行う、を念頭に、メディア社会学科だけでなく、他学部他学科の学生も受講可能な科目として、2つのキャンパスで同内容を開講した(亀岡キャンパス：木3／受講生124名、太秦キャンパス：金3／受講生8名)。

- (5) 安易なコピペの誘因の1つとみなされ、フリーの百科事典＝誰もが自由に(＝無責任に)編集できるWikipediaの使用を制限／禁止する教育現場が増えているようであるが、便利な道具＝メディアとして、筆者は積極的に授業においても活用している。今回の講義においても、メディアの基礎知識の確認(主に「ギフォード2000」を使用)とともに、『ビギナー』の放送当時(2003年)の世相や流行等、フジテレビの月9の歴代のドラマとその社会的影響、『ビギナー』の出演者・スタッフ・主題歌はじめとする使用曲、視聴率調査の仕組みと歴史、そして、『ビギナー』の背景となる司法関連(三権分立、権利の濫用、推定無罪、裁判官・弁護士・検察官の役割、裁判員制度、新旧司法試験、法科大学院、司法試験予備試験他)等々の情報の提示を、Wikipediaだけでなく、YouTubeやニコニコ動画等を使用し、必要であれば、専門サイトや当時の新聞の復刻版、法律の入門書等を用いた。また、Wikipediaのいくつかの項目で記述ミスも判明したので、その指摘をして、Wikipediaの

問題点等も説明した。なお、「Amazon はパワポ使用禁止!? 世界トップ企業に学ぶ高効率会議の作り方」[スミフラボ：20150309] <<http://sumifulabo.sumitomo-rd.co.jp/office-info/top-meeting/>>等の批判があるプレゼンテーションソフトについても、PowerPoint とは似て非なる Keynote を用いて、後述する各種映像とともに、各回の受講者が提出した小レポートをスキャニングして、意見や質問等をセレクトし、iPad を用いて、次回の授業の前半に、受講者の直筆をそのまま大画面で提示し（誰が書いたものなのか等は非公開）、一切の板書することなく、授業を進行させた。

- (6) 手元にあるビデオや DVD 等を、著作権法の第38条(営利を目的としない上演等)、第35条(学校その他の教育機関における複製)を前提に授業に使用したが(教育における著作権については、京都教育大学による「学生と教師のための著作権基礎知識」<<http://kyoshien.kyokyo-u.ac.jp/public/chosakuken/kisochishiki.pdf>>を参照)、それらは、この授業のために特別に選んだものではなく、筆者が日常的に接し、楽しんでいるものである。『ビギナー』以外で、各回の講義で使用したテレビ番組、映画等は以下のものである(YouTube でのカーペンターズ「Top of the World」等のミュージックビデオや、復習を兼ねて再度上映したもの等を除く、そして、『ビギナー』以外は、基本的に、時間の都合上、筆者自らが適宜短く編集したものを用いた)。《02》月曜から夜ふかし(NTV：20150330 OA)、ゆとりのためのメディアリテラシー(ニコニコ動画：20080329 公開)、水曜日のダウンタウン(TBS テレビ：20140716 OA)、ピタゴラスイッチ(NHK 教育：2003 OA／第25回)、考えるカラス(NHK Eテレ：2013 OA／第1回)。《03》ワイドナショー(フジテレビ：20150329 OA)。《05》水曜歌謡祭(フジテレビ：20150506 OA)。《06》陸軍中野学校(監督：増村保造／1966年公開)、万能鑑定士Q(監督：佐藤信介／2014年公開)、Lie to Me(アメリカ FOX：2009年／第1話)、密着！秋元康2160時間～エンターテインメントは眠らない～(NHK BSプレミアム：20130211 OA)。《07》ビー・バップ・ハイスクール(監督：那須博之／1995年公開)。《08》SmaSTATION(テレビ朝日：20071223 OA)、スーパーテレビ情報最前線(日本テレビ：19960819 OA)、《09》ドラゴン桜(TBS テレビ：2005年／第1話)《11》HERO(フジテレビ：2001年／第2話)、『HERO(フジテレビ：2006年／第1話)』。《12》リーガルハイ(フジテレビ：2012年／第4話)、Dr. 倫太郎(日本テレビ：2015年／第1話)。《13》月曜から夜ふかし(日本テレビ：20140707 OA)、HERO(フジテレビ：2001年／第4話)、HERO(フジテレビ：2001年／第1話)。《14》ジョブチューン(TBS テレビ：20141011、20150418 OA)、サンデージャポン(TBS テレビ：20150705 OA)、TV タックル(テレビ朝日：20150518 OA)、行列のできる法律相談所(日本テレビ：20130616 OA)、中居正広のミになる図書館(テレビ

朝日：20150615 OA), キリトル TV(テレビ朝日：20140103 OA), あさイチ(NHK：20150522 OA), サンバリュ(日本テレビ：20150607 OA), とんねるずのみなさんのおかげでした(フジテレビ：20150702 OA), 水曜日のダウンタウン(TBS テレビ：20140507 OA), ふぞろいの林檎たち(TBS テレビ：1983年／第1話, 第10話), テストの花道(NHK Eテレ：20120903 OA)。

《15》月曜から夜ふかし(日本テレビ：20150706 OA), スーパーテレビ情報最前線(日本テレビ：19960819 OA), なるようになるさ(TBS テレビ：2013年／第1話), ワイドナショー(フジテレビ：20141221 OA), してみるテレビ！教訓のススメ(フジテレビ：20150320 OA), ダウンタウンなう(フジテレビ：20150417 OA), アウトデラックス(フジテレビ：20140508 OA), 淳と隆の週刊リテラシー(東京 MX テレビ：20150425 OA), カリキュラムシーン(日本テレビ：1974～1978年), BAZOOKA!!! (BS スカパー：20150126, 20150427, 20150608 OA), 図書館戦争(フジテレビ：2008年／第1話), 悪夢ちゃん(日本テレビ：2012年／第4話), 泣くな, はらちゃん(日本テレビ：2013年／第10話)。これらのセレクトは、あくまでも恣意的なものであるが、いわゆる大学人は、テレビ＝報道であると同時に、低劣なメディアと見ながち、そして、いわゆるメディアを専門とする研究者たちにとっても、テレビのメディア・リテラシーとは、テレビの偏向放送を批判せよ、となることがほとんどである。まして、いわゆるドラマやバラエティ番組等は、批判する対象以外としては、存在しないに等しい。そのような状況で論じられるテレビというメディアとは、一体なに？と筆者個人は常に考えてしまう。また、初回の小レポートとして、「あなたにとって、メディア・リテラシーとは」「授業に対する要望等」に加えて「あなたにとって、テレビとは」「あなたが一番好きなテレビドラマは」を述べてもらった。結果としては、一部の受講生は、テレビ番組に関心を持ち、好きなテレビドラマをいくつもあげていたが、そのほとんどは、あまり関心がなく、まったくテレビドラマを見ない者も少なからず存在した。この授業の目的は、いわゆるテレビ(ドラマ)研究ではないが、個人的な目的の1つは、真摯にテレビ番組を見ることの訓練という側面もあった。山内が指摘するように、メディア・リテラシーについての考え方の相違による、いくつかのグループが存在するが([水越+山内2000, pp. 46-47]), 今回の授業においては、いわゆる「映像リテラシー派」のように、受講生たちが映像メディアについての理解を深めるために、視聴を積み重ね、「放送利用派」のように、さまざまなテレビ番組等を、いわゆる部分＝道具としても、活用した(なお、各授業で、テレビドラマをはじめとするさまざまな作品を、いわゆる硬軟取り混ぜ、部分＝道具として活用しているが、その使用については、毎回、可能な限り注意を払っているつもりである。というのは、当然のことではあるが、セリフひとつを抜き出すに

でも、その意味は文脈によって、まったく異なるからである。それとともに、筆者個人として、廣瀬が指摘する「映画は鏡ではありません。むしろ世界や社会の方が鏡なのであり、映画の後を追っているのです。さもないと映画に限らず芸術などいったい何の意味があるのでしょうか。わざわざカネを払ってまで映画館に行くことに何の意味があるのか。映画は文字どおり世界を創造するのであり、映画の真理は直ちに世界の真理なんです。映画館から出てきて街の光景を再び目にするたびにぼくたちが身をもって体験しているのはまさにこれでしょう。映画やその他の芸術を『素材』としてしか扱えないタイプの社会学がまったく理解していないのはこのことです。そういうくだらない社会学者たちには、映画作品のなかに社会の反映を見るだけなら、最初から社会を見ればいいんじゃないですかと行ってやりたいですね。」[廣瀬2010, pp.101-102]に強く共鳴するからである)。ただし、いわゆる「マスメディア批判派」のような立ち位置は取らなかった。つまり、いわゆる小智恵がついたうるさい視聴者を生み出すのではなく、テレビというメディアを楽しんでもらう。言いかえれば、世界各国のメディア(・リテラシー)教育をレポートした菅谷が指摘する、アメリカのメディア・リテラシーが、メディア=有害=騙されないために、と対照的に、イギリスのメディア教育の目的は、メディアを理解し、それによって文化を育むといった視点から捉えられている。メディアを教えることは目の肥えたユーザーを育てる。メディアを理解した人はメディアの良き理解者になってくれる。制作者のジレンマがわかり、高度な芸術性もわかるようになるからである[菅谷2000, 第1章]。筆者は、イギリスの方式を模倣した訳ではないが、テレビというメディアの理解者を生み出す授業を展開することを試みたつもりである。ドラマを選択したのは、初回の小レポートでもわかるように、最近の風潮として、世知辛い身のまわりの現実だけに関心があり、日常的に接することが少なくなった、フィクションというメディアの可能性(と不可能性)を実感してもらいたいと考えたからである。プラス、連続ドラマをまとめて見る、ではなく、毎週、次回を楽しむにしながら、みんなでいっしょに、同時間に見る、という、かつては、全国のお茶の間で普通に行われていた視聴行為を追体験してもらいたかったという理由もある。なお、視聴するドラマの候補もいくつかあったが、『ビギナー』を選択したのは、単純にテレビドラマとして優れているだけでなく、内容的に、法律という社会の理想と現実を学ぶ者たちの青春物語ゆえ、学業や就活等々さまざまな問題を抱える大学生たちとの共感性が高いと考えたからである。そして、技術的にも、月9で最初のHD[高精細度]=16:9=デジタル制作のドラマで(ただし、実際は、筆者含めほとんどの一般視聴者は、SD[標準画質]=4:3=アナログでリアルタイムに毎週見ていた)、当初はVHS=SDを、後にDVD=HDの映像が販売された。今回は、SDと

HDの違いを体感してもらうために、第4話まではSDで、それ以降はHDの映像を上映した。

- (7) 多義的なメディアを扱うだけに、その教育についても、多方面に展開されている。そして、巻末の参考文献に挙げたように、いわゆる教育業界、(元)メディア業界の人たちを中心に、メディア・リテラシーを、単なる机上だけでなく、実践的に論じる書籍の出版は絶えない。ただし、あくまでも、筆者の個人的な印象ではあるが、熱心に読むに価するものは多くはない。かつて、メディア・リテラシーを教える、の主流であった、いわゆるマスコミの大企業に勤務している／いた、ことのみが優位性の人たちによる自慢話の吹聴等は論外であるが、各人の専門分野や関心領域によって、いろいろな見解や方法論等を示してくれてはいる、けれども、「伝えられる情報は恣意的に編集されている、それらを疑え」を説きながら、教える者自身が疑われる存在であることを自覚していない、その出版物自体が、レイアウト等をはじめとして単なる紙に文字を印刷したもの以上の配慮／工夫がなされていないものばかりだからである。多様性を問うはずのメディア・リテラシーが、「〇〇が正解」を示すことは論外にも思える。特に、教員たちによるものは、その立場上、仕方のないことなのかもしれないが、「私(=教師)の言うことは絶対的に正しい」を当然のものとしている。個人的には、そのような教育方法には嫌悪しか感じない。そこには、内田が指摘するような「ためらい＝自分が間違っているのではないかと疑う知」がないからである〔内田2001〕。夜郎自大であることを自省しながら述べれば、今回のメディア・リテラシーという授業は、《私は、大学卒業後、メディア業界の`現場。を流浪したあげく、幼い頃から大の学校嫌いがなにをトチ狂ったのか、2つも大学院に通うハメになり、なぜか今は大学という職場で働いている(基本的に今でも教師も学校も大嫌いである)。《…》大学というのは、教員と呼ばれるエラそうな人たちから一方的に「教わる場」ではなく、あくまでも自らの意志で自分に必要なことを「学ぶ場」である。そして、「日常の風景を異化する(=それまであたりまえだと思っていたものごとを改めて問い直す)場」なのである。》「ところで、メディアってなに？ メディアで遊ぶ？」<[http://archive.kyotogakuen.ac.jp/~o\\_human/10th/sociology7\\_detail.html](http://archive.kyotogakuen.ac.jp/~o_human/10th/sociology7_detail.html)>を前提に、ブリコラージュ＝使えるものはなんでも使うことを基本姿勢として、あくまでも「もし自分が学生だったらどのような情報が欲しいか(と同時に、一教員として、大学生のこの時期になにを課すべきか)」を試行錯誤というよりも、ある意味、楽しみながら、15回のワークショップとして構成し、教える、というよりも、facilitate＝人と情報の交通整理をした。この講義の詳細については、あくまでも参考資料でしかないが、毎週、編集に苦勞したレジュメ<[http://bricolage.jp/study/kgu2015\\_media-literacy\\_20150419-20150717\\_resume.pdf](http://bricolage.jp/study/kgu2015_media-literacy_20150419-20150717_resume.pdf)>を参照。

なお、今回は、いわゆる講義系の授業であったが、メディア・リテラシーを学ぶには、頭だけでなく、いわゆる自らの手を動かす、も必要であることは言うまでもない。ただし、その場合には、急速なメディア機器の進歩や普及による、メディアの個人化の現状について、きちんと考えなければならないであろう。それらの問題をも含む、[関口2008a] [関口2008b]の再考および、いわゆるメディア体験＝単に、つくれば良いのか、の是非を改めて問う「制作系ワークショップの(不)可能性について(仮)」を別稿で展開予定。

- (8) あくまでも、いわゆる講義科目として授業を展開したが、各回の小レポートでの意見交換を特に重視し、横道に逸れることも多々あったが、その発言等を制限することはほとんどしなかった(いわゆる教室のエアコンが寒い／暑い、といった不平や要望等は紹介したが、今回はおもしろかった／つまなかった、のような、根拠もなく適当に書かれたようなものは選択しなかった)。結果、さまざまな意見が飛び交った。そして、回を重ねる毎に、それらの意見が多様化し、新たな展開に応じて、当初予定していたものとは異なる情報や映像等がどんどん追加されることになった。全体的な傾向としては、たとえば、『ビギナー』については、いわゆる法律ドラマに恋愛エピソードは必要かという賛否両論等からはじまり、自分の無知が原因で妻を殺害した夫は自殺幫助か同意殺人か、というシリアスな展開の第7話と第8話で、その判決に対する同意や反論で、十人十色の見解が示された。そのいわゆる無知の問題については、『ドラゴン桜』の中のセリフ「世の中は頭のいい奴らが自分たちの都合のいいようにルールを作っている。騙されたくなければ、勉強しろ！」への共感へとつながり、そして、『リーガルハイ』から展開された「正義の反対は(悪ではなく)別の正義だ」から、いわゆる絶対というものがないことに気がつき、70～80年代に放送されていたバラエティ番組等を見せることによって、現在進行している日本昔話やテレビ番組の各種規制について改めて考えはじめた者たちもいた。一方、『HERO』で冤罪を生まないための理想論が語られたが、現実的には『TVタックル』の痴漢冤罪の実例等から、簡単に解決できない問題であることを改めて実感した、という意見もあった。また、『テストの花道』で小論文の書き方を紹介した際には、小論文だけでなく、まともな文章の書き方をこれまで教わってこなかった、これを高校時代に知りたかった、就活に活かしたい、という意見が多数出てきた。そして、最終回である15回目では、まず、「大学の授業は、単位のためだけに受講するのか？」と(時代遅れの)問題提起をし、いわゆる「もぐり受講」の解説とオススメの授業を紹介した。そして、筆者が担当する各授業の最終回で必ず行っているのが、受講生たちによる「授業評価アンケート」を、テレビの視聴率とみなして、その結果をもとに、テレビ番組制作者(＝授業の担当者)と視聴者(＝受講生)の間にコミュニケーションが成立してい

## メディアのリテラシーを教えることは可能なのか？

るのか(その数字に意味があるのか等)を問うことである。特に、山科けいすけの8コママンガ『パパはなんだかわからない』を例に、大学の授業は、あくまでも思考の訓練をする場所であって、プリントの穴埋め等をして、その場限りの満足を提供する時空間ではない、少なくとも私はそのような講義をするつもりはない。ただし、いわゆる文字メディアだけでなく、映像等のメディアも活用して、大いに楽しむ授業を行おうとしている。しかし、その楽しさとは、大学＝知と戯れる場としての楽しさである等々…。

授業の後半で、最終レポートとして、以下のようなものを課した(各回の小レポートと同じく、なんでも持ち込み可、スマホも使用OK。授業時間内に書き終わらない場合も、納得できるまで書くことを許可した)。《まず、自分のことばで『メディア・リテラシーとは〇〇である』と定義して下さい(単語でも文章でもOKです)。そして、社会生活を送ることにおいて、そのメディア・リテラシーが必要である理由(たとえば、メディア・リテラシーを身につけることによって、他人同士がわかりあえるから等)と、どのような教材を選択し、どのように活用して教育すれば、それが身につけられるかを、これまでの15回の講義で使用した各種映像や受講生たちのいろいろな意見等の具体的な事例を用いながら、自分の考えを述べて下さい(必要ない・わかりあえない・身につけられない等の説明でもかまいません)。》。そして、さまざまな考えが提出された。本人たちの承諾を得た上で、2人のレポートを転載する。《メディア・リテラシーとは、メディアの構造を理解し、メディアを自分の意思表示として各自が適正に使うことが出来るように思考し、実行する能力である。社会生活を送る上で何故それが必要かと言うと、私たちのコミュニケーションの形態が常に変化しているからである。しばしば私たちは、他者と意見を交わし合い、時に衝突する。完全に分かり合えることは難しい。だがそれらの壁を言語を使って対話しながら、両者の間で社会的合意形成を図ることが出来る。しかし今私たちは言語のみにとどまらず、言語を根幹として様々な手段を活用する環境を手に入れている。言語や文字だけでなく、身近なスマートフォンやコンピュータで映像や音楽等も制作可能となっている。選択肢が開かれた分、それらを理解し、それらについて考えることは自ずと必要になる筈だ。では、どのような教材を選択し活用すればメディア・リテラシーが身につくか、ここでは講義でも中心に取り上げられていた映像を例に、それはどういうことなのか考察してみたい。映像と言っても様々であるが、例えばテレビは娯楽で、低俗とみなされていることが多い。しかし私は今回の講義でテレビドラマを1クール視聴して強く感じることもある。それらは、集中している時と普段のように流れている映像をただ見ている時を比べると、情報量や見え方が全く異なるということだ。バラエティとテレビドラマに限って言えば、これらの2つは日常の中で知らず知ら

ずのうちに忘れてしまうユーモアや驚きの気持ちを思い出させてくれたり、ある問題について身近なことのようを感じる事が出来るように作られていたりする。私たちが特にこの2つを前述のように考えているのは、テレビそれ自身の問題ではなく、テレビは所詮娯楽としか考えられない私たちの中に問題が潜んでいるのかも知れない。講義を通して、ふさわしいと思われるようなものは、誰にとって、どんな部分がよい、と思われているのか考え直してみると、私たちが普段ついつい低俗だとみなしているものは、本当にそうだったのか？という問いや、思考の偏りを和らげる機会に巡り会えるのではないだろうか。最後に活用の部分について触れていくのだが、逆説的に、この理由から活用出来ていなかったのではないだろうか、という問いから考えていきたい。その理由とは、私たちは自覚している以上に、映像を「見っぱなし」にしていることである。それは、講義で半分もの時間を費やして紹介される小レポートと、そこから広がる思考の過程、リンクしている別の情報と毎回接することによって生まれた気付きである。映像を見て自分の持つ考えのみに終始してしまうのではなく、他者の意見／異見に触れるだけでも、新たな発見がある。別の情報に触れることも含めて、映像に対する印象も見方も常に変化するが、その発見の繰り返しによって、経験は更に豊かなものになっていくのである。今回映像に限定して、実際に自分が映像を作る、ということよりも、そこに向けて考えていくことに重点を置いて、教材の選択や活用(メディア・リテラシー)について考察を試みた。映像に限定はしたものの、他のもの、ことに関しても、恐らくこれらの考え方は当てはめ、応用することは可能である。より多くの選択肢が提示されて、活用するための術についてさえも、私たちは以前よりもはるかに多くの情報を手に入れることができる。そして今、作る＝実行の部分はどんどん便利になってきている。だからこそ、自分の感性と対峙する＝思考する、を軽視してはならない。深く思考することが出来なければ、いずれは情報の多さに戸惑い、判断することを止めてしまうかもしれないからである。よりよいコミュニケーションは、他人が先導するものではなく、自分の手でデザイン出来るようになったのだ。安易に技術に依存するのではなく、それらで何が起きているか、何が出来るか？ということに目を向け、自分にとってベストだと思われるものを選択していく力を身につけなければならないのである。》。《この「メディアリテラシー」という講義は全15回をかけて「考える」をテーマとしたものだったように感じる。「考える」ということは、自分自身と相談することであり、新たな視点を自らの中に築くということである。結論から言えば、これが「メディアリテラシー」の力である。我々は学生であるが、ただ学問に関する知識を耳にするだけでは「学問」にはなり得ない。基本的なことから、自身で考察し、それを発信するのが学生である。近年のネットを見ていると、他

## メディアのリテラシーを教えることは可能なのか？

人の受け売りの知識しか述べない学生が目立つ。それは種類問わず、メディアの波に捕らわれていると言っても過言ではない。一つの間違った情報が、次の受け売り学生に伝わり、さらに次の学生に、といった負の連鎖につながっていく。ここで「考える力」、メディアリテラシーの力が必要とされる。ただ他者からの情報を肯定したり、否定したりするのではなく、情報の“元ネタ”を理解した上で、「この人はこう言っているけど、ここではこうなんだな」というような、視野の広い理解が必要とされる。それでは、メディアリテラシーの視点はこういったものから身につけることができるのか。それは、身の回りのものならば、バラエティやドラマなどを教材としても良いのである。バラエティにおける街角調査は本物なのか、このドラマの主人公は本当に正しいことをしているのか等、とにかく、自身の意思を交えて深く批判的に考えていくことが重要になる。ただ、「批判的」というのは、物事を否定的に捉えることではなく、公平に見渡せる視点を持つということだ。ドラマ『ビギナー』の主人公のように、感情に流されて一方の意見に傾斜することは人間的ではあるが、公平さには欠ける。双方の意見を収集し、考えていくことは、メディアに限らず、人間関係においても同じではないか。メディアリテラシーと言えども、一つの物事に関する見方は千あると言っても良い。であるから、様々な人間と議論を交わし、一つのものに昇華させていくことが大切なのだ。『ビギナー』で主人公たちが、事例について、テーブルを囲んで議論をくり広げたが、メディアに対しても疑ってかかることは、自身にもプラスに影響する。見て、疑って、考えて、知る。我々学生に必要な論理的思考力はメディアリテラシーと通ずる。コピー＆ペーストなどせず、自身で考え、批判し、一步を踏み出すこそが現代に求められている。》。

いずれにしても、いわゆる授業準備も、あくまでも自己満足であることを自覚しつつも、毎週、レジュメ＝A4表裏の雑誌を編集発行し、90分間の情報番組を構成演出するような心積もりで、授業前日は徹夜が当然という過酷な体制であった(Keynoteのページ数は、毎回平均80ページを超えていた…)。そして、授業自体も伝える情報量が多いため、毎回、時間が足りず、時には、休み時間にレポートを書くことになり、受講生たちにも迷惑をかけたことは否めない。しかしながら、一部の、いわゆる大学の授業の目的＝よりラクに単位を取る、と考える学生を除き、授業評価アンケートによれば、概ね、満足してくれたようである(テレビ番組／ドラマの楽しさを再発見した、という声も多かった)。14回目の小レポートで以下のようなものもあった。この講義から、新たななにかを学んでくれた学生がいたのかもしれない(転載承諾済)。《今まで受けたことのない形式での講義であったが、個人的には毎回楽しみにしていた。映像資料は多くの場で視聴覚素材として使われているが、その多くは教育上好ましいもの、と教える立場の意向にそぐう範囲内でのみ、

機能していたように感じる。勿論、これはその範囲の中で使用されていた映像を否定することではない。しかしながら、民放のドラマ、それに加えてバラエティや子ども向け番組 etc を資料として持ち出す教員が今まで身の周りに存在していたらどうか。私の記憶に限って言うと、利用されていたのは教育用として作られたものと、NHK が制作したものくらいである。それでもこの講義に使われた映像は、どれも馬鹿にするようなものではなかった。ふざけたり、面白おかしく作られているものも含めて、そして、それについて知り、それについて考えることも含めて全てが私が普段見て考えていることとは、また別の視点を、ある時は全く違う視点を示していたと思う。映像だけでなく、受講者の意見を、その人自身の字で受け取ることが出来ることや、レジュメ等々の文字情報が充実していたことも、とても有意義だった。様々なメディアが、様々な意志によって、様々な方法で構成されていることに気付くことが出来る時間であった。》。

## 参考文献

- 青山学院大学大学院社会情報学研究科ヒューマンイノベーションコース『これからのメディアをつくる編集デザイン』フィルムアート社 2014
- アート・シルバークラット(安田 尚 訳)『メディア・リテラシーの方法』リベルタ出版 2001
- 飯田 豊 編著『メディア技術史—デジタル社会の系譜と行方』北樹出版 2013
- 池上 彰『池上彰のメディア・リテラシー入門』オクムラ書店 2008
- 井上 泰浩『メディア・リテラシー—媒体と情報の構造学』日本評論社 2004
- 内田 樹『ためらいの倫理学—戦争・性・物語』冬弓舎 2001
- 奥泉 香編『メディア・リテラシーの教育—理論と実践の歩み』溪水社 2015
- かながわメディアリテラシー研究所『畳とメディア・リテラシー Media literacy on a tatami mat』密林社 2013
- カナダオンタリオ州教育省 編(FCT 市民のテレビの会 訳)『メディア・リテラシー—マスメディアを読み解く』リベルタ出版 1992
- クライブ・ギフォード(日本語版監修 水越 伸)『メディア(ビジュアル博物館 第80巻)』同朋舎 2000
- 黒田 勇 編『送り手のメディアリテラシー—地域からみた放送の現在』世界思想社 2005
- 芸術メディア研究会『メディア・リテラシー』静岡学術出版 2008
- 後藤 武士『小中学生のための世界一わかりやすいメディアリテラシー』宝島社 2008
- 小林 正幸『メディア・リテラシーの倫理学』風塵社 2014
- 駒谷 真美『わくわくメディア探検—子どものメディアリテラシー メディアと楽

- しく上手につきあうコツ』同文書院 2012
- 坂元 昂 文部科学省メディア教育開発センター編『教育メディア科学—メディア教育を科学する』オーム社 2001
- 佐藤元状+坂倉杏介 編『メディア・リテラシー入門—視覚表現のためのレッスン』慶應義塾大学教養研究センター選書 2010
- 児童言語研究会 編著『メディア・リテラシーを伸ばす国語の授業 小学校編』一光社 2005
- 児童言語研究会・中学部会 編『中学生と学ぶメディア・リテラシー—メディア社会を生きる力を育てる』一光社 2006
- 清水克彦+岸尾祐二『メディアリテラシーは子どもを伸ばす—家庭でできること、学校でできること』東洋館出版社 2008
- 下村 健一『10代からの情報キャッチボール入門—使えるメディア・リテラシー』岩波書店 2015
- 菅谷 明子『メディア・リテラシー—世界の現場から』岩波新書 2000
- 鈴木 みどり 編『最新 Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』リベルタ出版 2013
- 関口 久雄「かつての子どもたちが集う大学という遊び場：ワークショップという“挑発”について」(『月刊子どもの文化』2008年9月号)子どもの文化研究所 2008a
- 関口 久雄『メディアのプリコラージュ：つくる・遊ぶ・考える』冬弓舎 2008b
- 東京大学情報学環メルプロジェクト『メディアリテラシーの道具箱—テレビを見る・つくる・読む』東京大学出版会 2005
- トロント市教育委員会 編(吉田 孝 訳)『メディア・リテラシー授業入門—情報を読み解き自ら考える力をつける』学事出版 1998
- 豊田 正子『新編 綴方教室』岩波文庫 1995
- 中橋 雄『メディア・リテラシー論—ソーシャルメディア時代のメディア教育』北樹出版 2014
- 西端 律子+林 英夫+山上 通恵『メディアリテラシー—情報を読み解き、発信する』実教出版 2004
- 長谷川 一/村田 麻里子 編著『大学生のためのメディアリテラシートレーニング』三省堂 2015
- 長谷川 豊『テレビの裏側がとにかく分かる「メディアリテラシー」の教科書』サイゾー 2014
- 林 直哉『高校生のためのメディア・リテラシー』ちくまプリマー新書 2007
- 廣瀬 純「映画から革命へ—『同じこと』の潜勢力を見出す」(本橋 哲也 編『格闘する思想』)平凡社新書 2010
- 福井県教育工学研究会『学校で拓くメディアリテラシー』日本文教出版 2002

- 藤川大祐＋塩田真吾 編著『楽しく学ぶメディアリテラシー授業—ネット・ケータイ、ゲーム、テレビとの正しいつきあい方』学事出版 2008
- マーシャル・マクルーハン＋エドモンド・カーペンター(大前正臣・後藤和彦訳)『マクルーハン理論 電子メディアの可能性』平凡社 2003
- 松野良一＋間島貞幸＋五嶋正治＋村田雅之＋塚本美恵子 編著『映像制作で人間力を育てる—メディアリテラシーをこえて』田研出版 2013
- 水越 伸『21世紀メディア論』放送大学教育振興会 2014
- 水越 伸＋東京大学情報学環メルプロジェクト 編『メディアリテラシー・ワークショップ—情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する』東京大学出版会 2009
- 水越 伸＋山内 祐平「対談 メディアリテラシーを考える—論点整理といくつかの具体的アプローチ」(『新・調査情報 passingtime』2000年1月号)TBS メディア総合研究所 2000
- 水越 敏行『メディアリテラシーを育てる(21世紀型授業づくり)』明治図書出版 2000
- 無着 成恭『山びこ学校』岩波文庫 1995
- 目白大学社会学部メディア表現学科『メディアと表現：情報社会を生きるためのリテラシー』学文社 2014
- 森 達也『世界を信じるためのメソッド—はくらの時代の—はくらの時代のメディア・リテラシー』理論社 2006
- 富山 英彦『メディアリテラシーの社会史』青弓社 2005
- 森本 洋介『メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力の育成』東信堂 2014
- 山内 祐平 編著『デジタル教材の教育学』東京大学出版会 2010
- 山内 祐平 編著『学びの空間が大学を変える—ラーニングスタジオ／ラーニングコモンズ コミュニケーションスペースの展開』ポイックス 2010
- 渡辺 武達『メディア・リテラシー—情報を正しく読み解くための知恵』ダイヤモンド社 1997
- 渡辺 武達『メディアリテラシーとデモクラシー—積極的公正中立主義の時代』論創社 2014
- 渡辺 真由子『オトナのメディア・リテラシー』リベルタ出版 2007
- \*本稿で紹介している WWW サイトの URL は、2015年9月10日現在のものである。

最後に、新たな試みである「メディア・リテラシー」15回の講義＝ワークショップでは、試行錯誤を繰り返し、いろいろとご迷惑をかけたかもしれません。少しでも、知的に楽しんでいただけていれば幸いです。全受講生132名のみならず、ご協力いただき本当にありがとうございました。<(\_)>